

第 27 回九州・山口有機農業の祭典・第 48 回日本有機農業研究会全国大会総会 合同大会  
全国有機農業の集い 2020 in 水俣  
【大会アピール】

「水俣に出会い、つなぐ、」

水俣病の公式確認から 60 年以上という歳月を経て、私たちは再び水俣の地に集いました。水俣病をはじめ水俣で起きたことは、メチル水銀という人間の作り出した化学物質が、自然と生き物に致命的な害悪をもたらしたケースでした。しかし、私たちは素材こそ違え、今日も同じような形で過ちを繰り返しているのではないかという反省から、今一度、水俣の問題を見つめ直します。

福島原発事故による放射能汚染、グリホサートやネオニコチノイド系農薬の拡散、深く静かに進行する微細プラスチックの蓄積など、いとまもなく新たな問題が生み出されている現実があります。これらにはいずれにも、「この問題は水俣で起きたことと同じだ！」と気づかされる、人間社会の対処の仕方があります。最初は問題を隠す。その後存在が明らかになると、すり替える、矮小化する。そして、根本にある責任を認めないまま放置する。

それに対抗していくには、被害にあった者への深い共感、あるがままの命や自然が持つ、かけがえのない価値の自覚、また、それに沿って自らのあり方自身を変えていく勇気と、たゆまない小さな実践の積み重ねが欠かせません。

「さらに繋ぎ、継げる。」

この大会では水俣現地からの、様々な世代の語り手によって、決して終わったことでなく今に続く闘いの現状と課題や、その力の源泉に「有機農業」の世界観があることが伝えられました。このことをきちんと共有して、広げていきましょう。

一見合理的で、豊かさをもたらすかに見える科学技術の進歩ですが、暴走すると自然破壊や健康破壊につながります。特に、有吉佐和子さんが指摘したように、様々な要素が絡み合っ、「複合汚染」として時間的経緯を持って現れる現象の中では、原因の特定そのものが難しいことも事実です。

だからこそ、農と食に関わる私たちは、安全で堅実な方法で生産や消費のあり方を組み立てていく必要があります。特に今日、遺伝子操作を無制限に種の世界に持ち込むことや、先に述べたグリホサートやネオニコチノイドの大量使用を、規制しないどころか緩和していくような日本農政のあり方は、根本的に変えられるべきです。もちろん、活断層だらけの地震大国日本に、50 基以上の原発を作り、さらに新規に建設を伺うというような政策は、生活者としての反撃で止めさせなければなりません。

自然に寄り添いながら耕し、糧を得ていく有機農業の営みはそれだけで大きな意義を持ちます。しかし、さらに人と人との関係を耕し、食べ方が作り方を決め支えていくという、消費者を含めた大きなうねりになっていくことが大切です。有機農業運動は紛れもなく「世直し」の運動でもあるのです。この水俣の大会を、その新たな一歩にしていきましょう。

2020 年 1 月 26 日